

文書等並べて迎る、家康、松平一族・家臣

徳川家康 75年の生涯 年表帖

中巻 (全3巻)



その時、秀吉は。最強の家康に
天下人秀吉の配慮がにじみ出る

目次

| | |
|-------------------|--------|
| 関連写真 | 表紙裏 |
| はじめに～この本の使い方～ | 2 |
| 目次年表 | 3～17 |
| 関連城跡位置図 | 18～25 |
| 家康の妻妾と子供 | 26～27 |
| 徳川家康75年の障害年表帖(中巻) | 28～238 |
| 主な参考文献 | 239 |
| あとがき、奥付 | 240 |
| 関連写真 | 裏表紙裏 |

はじめに～この本の使い方～

この本は、「本能寺の変」前の天正10年から「文禄の役」までの家康中心の戦国期の年表で、日付までを記載しています。一部不明な月・日付に関しては、「一」で割愛をさせて頂いたり、「秋」「下旬中旬」などと、表記しておりますのでご了承下さい。

特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われる事件等や家康文書などは、太字で記載しております。

本体となる戦国年表はそこそこな分量となっております。目次年表は、圧縮しており、その項目の通しNoが記載されております。検索の一助として下さい。

～太陰暦・太陽暦について～

本書での月日の表記は全て和暦を採用しており、一部、西暦の表記とはズレが生じています。

日本では、明治5年12月3日(=明治6年1月1日(西暦1872年1月1日))までは太陰暦(旧暦・天保暦)を、それ以降は太陽暦(新暦・グレゴリウス暦)を使用しています。

そのため、太陰暦である和暦(旧暦・天保暦)の月日と、それに対応する太陽暦である西暦(新暦・グレゴリウス暦)の月日は一致しません。ご注意ください。

なお、太陰暦(太陰太陽暦)の1年は太陽暦の1年に比べて約11日短く、このズレは3年で約1月分(約33日)となります。

このため約3年に1度、余分な1ヶ月(閏月)を挿入して1年を13ヶ月とした閏年を設けることで、ズレを解消しています。

なお、閏月は閏●月と表記し、仮に閏4月があった場合、これは通常の4月の後に閏月(閏4月)が挿入されていることを示しています。

例)本能寺の変:天正10年6月2日(西暦:1582年6月21日)

| 西暦和暦 | 月日 | 出来事 | No. |
|------------|-------|---|------|
| 天正10(1582) | 1月7日 | 「二月に甲州を征伐する。長岡(細川)藤孝は、在国して安土を警護せよ」。織田信長、明智光秀と軍議。 | 3529 |
| | 2月3日 | 「武田征伐」。織田信長、甲斐国討伐の進路と分担を決定。駿河口は徳川家康、関東口は北条氏政、飛騨口は金森長近、伊那口は信長・信忠父子が二手に分かれて進軍。 | 3549 |
| | 2月16日 | 「家康、遠江を掌握」。徳川軍、遠江における武田氏の最後の砦・小山城を開城させる。家康は、永禄11年(1568)12月12日に遠江に進入して、今川氏の旧勢力を追い払うも、新しく武田信玄・勝頼父子の侵入に遭い、これと争うこと前後14年の長い間にわたって、ようやく遠州全土の経営が成った。 | 3567 |
| | 2月18日 | 「武田征伐」。徳川家康、浜松城を發し遠江国掛川城に着陣、駿河西部へ侵攻を始める。 | 3570 |
| | 2月21日 | 「武田氏の駿河占領、終わる」。徳川家康、駿府に侵攻。駿河国駿府館を占領。 | 3578 |
| | 2月29日 | この日、穴山梅雪(信君)、徳川家康に降る。穴山梅雪、家康から降伏勧告を受け、武田家の救済・家名存続を条件に、江尻城を開城。 | 3600 |
| | 3月1日 | 「依田信蕃、家康に降る一足かけ9年の歳月をかけ、家康は田中城を開城した」。徳川家康は、依田信蕃の立て籠る駿河田中城を包圍し、この月、「武田家臣は皆主家を背いており、滅亡は間違いない。直ちに開城せよ」と降伏を勧告する。信蕃は「武田家臣の書をもって真偽を計りたい」と答えたため、家康は穴山梅雪の書を送る。これを見て信蕃は城を明渡した。 | 3604 |
| | 3月5日 | 「武田征伐一信長、出陣」。織田信長、曉に陣立す。(『晴豊記』)。信長、明智光秀・筒井順慶・長岡(細川)忠興・長谷川秀一らの諸將を率い、甲斐に向けて曉に安土城を出陣、近江国坂田郡柏原成菩提院に着く。 | 3622 |
| | 3月10日 | 徳川家康、甲斐国市川に布陣。家康軍、市川大門にある上野城を落とし、一条信竜(信玄の異母弟)が戦死する。 | 3637 |
| | 3月11日 | 「甲斐武田氏の滅亡一武田信虎・晴信・勝頼三代、終わる」。武田勝頼(37歳)、小山田信茂の叛を聞く。天目山への途中、田野において織田方滝川一益の挾撃を受け、北条夫人(19歳)(北条氏康の六女)・信勝(16歳)(勝頼長男)と共に自刃。 | 3640 |
| | 3月19日 | 織田信長、高遠を経て、この日、諏訪郡上諏訪法華寺に着陣し、諏訪に赴いた徳川家康と会見する。 | 3662 |
| | 3月29日 | 「信長から新領の知行割が以下のごとく発せられた一家康は、嘗ての今川義元と同じ駿河、遠江、三河三ヶ国の大名となる」。 | 3679 |
| | 4月10日 | 織田信長、甲斐国甲府を出発し甲斐国右左口峠に着く。そして、徳川家康が普請・警護し、この日出発して駿河に向かう。 | 3700 |
| | 4月16日 | 信長、鎌田・三ヶ野坂で休息。天龍川に舟橋を架けて渡河。信長は、出迎えた徳川家康の接待に非常に満足する。信長、浜松泊。 | 3709 |
| | 5月11日 | 徳川家康、穴山梅雪(信君)と共に、旧領安堵のお礼のため浜松から安土へ出発。 | 3730 |
| | 5月18日 | 織田信長、自ら徳川家康の膳を据え、徳川家康家臣にも自ら「ふりもミこかし」を挽き、帷子を与えた。 | 3741 |
| | 6月2日 | 「本能寺の変」。信長自刃、49歳。明智光秀、この未明に謀反を為して京都本能寺の四方を取り囲み攻撃する。 | 3767 |
| | 6月3日 | 「家康三大危機の三番目一伊賀越え」。明智光秀の攻撃をかわすべく、木津川の草内渡しを越えた徳川家康、巳の刻に宇治田原城着、食事を摂る。主従は34名であったという。午の刻に出発、多羅尾光俊らの迎いで信楽の小川村の妙福寺で一泊し、この日、柘植・四日市、鹿伏兎越を経て伊勢に着き、那古(白子)にて乗船、途中土民の一揆の襲撃で危機に陥ったこともあり、「伊賀越えの御難」といわれる。 | 3772 |



| | | | |
|------|-------|--|------|
| 天正10 | 1月1日 | 織田信長、近江国安土城(滋賀県近江八幡市安土町下豊浦)において諸大名の年始祝賀を受ける。(『信長公記』)。 近江国安土城に於ける年頭参賀の際の祝儀は織田信長が「直ニ被仰出」れた「御誕」を遵守して大名・小名同様に十疋宛を献上することになった。年頭参賀には織田信忠・北畠(織田)信雄・神戸(織田)信孝・織田信澄・織田信包・明智光秀・筒井順慶・大和国衆・河内国衆・和泉国衆・摂津国衆、その他諸国衆へ同時に「御礼」が行われた。織田信長が年頭参賀の際に筒井順慶へ「御詞ヲ被懸」た。(『蓮成院記録』一月六日条)。「安土へ各礼に被出、諸大名小名悉以十疋つにて一礼在之……………同惣礼布衣の躰……、是は當春頓而可有出陣之間、無用之過善、不入事也と……」。(『多聞院日記』一月七日条)。この春に出陣を控えているために無用の出費を避けるために献上物は十疋ずつとし、参賀者はすべて「布衣」を着用した。天主に案内された諸大名は、すべて金にちりばめた「御幸の間」、天皇の行幸を迎える座敷を拜見する。 この年は、信長にとって天下統一事業が完成する年のはずであった。 | 3526 |
| | 1月1日 | 三河国額田郡の深溝城(愛知県額田郡幸田町深溝)城主・松平家忠(1555~1600)、遠江国牧野原城(静岡県島田市金谷)で越年す。(『家忠日記』)。 | 3527 |
| | 1月6日 | 「信州木曾の木曾義昌、武田勝頼に背く」。 義昌(1540~1595)は、昨年秋から苗木城(岐阜県中津川市苗木)の苗木久兵衛(遠山友忠)(1531~1605)を仲介役として織田信忠(1555/1557~1582)に通じ、織田信長と盟約を結んで武田勝頼に対し反旗を翻した。 木曾義昌は、勝頼が新城として葦山に新府城を築城開始した際には、賦役や重税に不満を募らせたといったとされている。 | 3528 |
| | 1月7日 | 「二月に甲州を征伐する。長岡(細川)藤孝は、在国して安土を警護せよ」。 織田信長(1534~1582)、明智光秀(1528?~1582)と軍議。 | 3529 |
| | 1月7日 | 松平家忠、遠江国牧野原城の定番を戸田氏と交替す。(『家忠日記』)。 | 3530 |
| | 1月14日 | 家康(1543~1616)、岡崎へ来る。(『家忠日記』)。 | 3531 |
| | 1月15日 | 近江国安土に於いて「竹爆」・「御馬汰」が行われる。(『信長公記』)。 信長は、近衛前久(1536~1612)を安土に招き、二百騎ほどで、爆竹を鳴らし左義長と馬沙汰を開催した。信長は仁田から進上された「やばかげ」・奥州から進上された「駿の馬」「遠江鹿毛」の名馬三匹を乗り回し、矢代勝介(屋代勝助)にも乗させた。 | 3532 |
| | 1月16日 | 追放された佐久間信盛(1528~1581)が昨年、紀伊国熊野にて病死。 織田信長、信盛の子・信榮(1556~1632)を赦免し、嫡男織田信忠に仕えさせる。(『信長公記』)。 | 3533 |
| | 1月16日 | 深溝松平家忠の長男(後の松平忠利)(1582~1632)、誕生す。(『家忠日記』)。 | 3534 |
| | 1月20日 | 織田信長、木曾義昌に朱印状を發給する。 木曾谷安堵と筑摩安曇両郡の加増を約束したという。 | 3535 |
| | 1月22日 | 松平家忠の長男(後の松平忠利)、竹谷清善(松平全保)(1505~1587)より「お猿」と名付けられる。(『家忠日記』)。 | 3536 |
| | 1月25日 | 武田勝頼の妹である真理姫が嫁いでいる、武田家臣で信濃の木曾義昌(信玄の娘婿)が、弟・上松藏人(義豊)(1543?~1611?)を人質として織田信長に出す。 真理姫(真竜院)(1550~1647)は、自ら義昌と離別して木曾山中に隠遁し、三男(末子)・義一(義通)と暮らしたといわれる。 | 3537 |

| | | | |
|------|-------|--|------|
| 天正10 | 1月27日 | 武田勝頼(1546~1582)に、木曾義昌謀叛の知らせが入る。 義昌に召し抱えられていた茅村左京進が新府城に馳せ参じて土屋右衛門尉へ注進という。勝頼は、木曾義昌の寝返りを信じず、木曾家に確認の使者を送ったが追い返されたという。翌日、武田信豊(勝頼の従弟)(1549~1582)を大将とした3千騎・仁科盛信(勝頼の異母弟)(1557?~1582)らの2千騎が木曾に進撃する。武田軍勢は木曾近辺に近寄ったが木曾の谷は雪が消えないと人馬共に通れないので在陣することになった。そこへ木曾から使いが来て逆意のないことを告げたという。 | 3538 |
| | 1月27日 | 「紀州雑賀の兵乱」。 信長の将・織田信張(1527~1594)を大将とする根来・和泉衆が、鈴木重秀(雑賀孫一)救援のため土橋若大夫の子(土橋平次)を攻める。 土橋平次を殺害するという事態が起きた。その発端は前年に土橋が孫一の継父を討ち殺したことにあり、孫一はその遺恨によって、信長公の黙認を得て土橋を殺害したのであった。(『信長公記』)。 | 3539 |
| | 1月28日 | 武田勝頼、上野善導寺に寺領を寄進。真田昌幸、之を奉ず。 | 3540 |
| | 1月28日 | 「天正遣欧少年使節」。九州のキリシタン大名、豊後の大友宗麟(1530~1587)・島原の有馬晴信(1567~1612)・大村の大村純忠(日本初のキリシタン大名)(1533~1587)が、名代としてロ・マ法皇に使節を派遣する。伊東マンショ(1569?~1612)(主席正使、宗麟の名代)、千々石ミゲル(正使、純忠の名代)(1569~1633)、中浦ジュリアン(副使)(1568?~1633)、原マルチノ(副使)(1569?~1629)の「天正遣欧少年使節」が長崎からローマに出航。大型帆船に正使・副使の少年四名とヴァリニャーノ(1539~1606)ら宣教師、船員合わせて三百名が乗船する。 | 3541 |
| | 1月29日 | 「天正十年作暦問題―信長は尾張の暦を支持」。 織田信長、安土城で本年の閏月の有無について、濃尾の暦師・賀茂在昌(1539~1599)と、陰陽頭・土御門久脩(1560~1625)を招き「糺決」。信長が当年十二月に閏月を入れるよう朝廷に伝える。本来、作暦の権利は朝廷にあり、当時の宣明暦では翌年正月の後に閏月が入るところを、信長が介入し尾張の暦(東国で使用されていた三嶋暦といわれる)を推薦し、十二月の後に閏月を入れることを伝える。 | 3542 |
| | 2月1日 | 「信長の武田征伐―2月1日~3月11日」はじまる。 中将信忠卿へ苗木久兵衛より調略の使者が遣わされ、「信州の木曾義昌が内通に应じましたゆえ、兵を出されますよう」との内容が伝えられた。これを受けた信忠殿は時日移さず平野勘右衛門を使者に立て、信長公へ調略の成功を言上した。すると信長公は「まず国境の軍勢が動いて人質を取り固めよ。しかるのち信長が出馬する」との指示を下した。この命を受けた苗木久兵衛父子は木曾勢と一手となって働き、木曾方からまず義昌弟の上松藏人を人質として進上させることに成功したのであった。信長公はこの人質に満足し、その身柄を菅屋長頼に預けた。(『信長公記』)。 木曾義昌の寝返りを受け、織田信長、甲斐・武田勝頼討伐の大動員令を發する。 | 3543 |
| | 2月2日 | 近衛前久(1536~1612)、太政大臣宣下。 武田氏・毛利氏征伐にあたり、織田軍の官軍化が着々と進行する。 | 3544 |
| | 2月2日 | 先に武田勝頼、人質としていた木曾義昌の母70歳と長男千太郎13歳・長女17歳を処刑。織田信長に内応した木曾義昌を討伐するため、自ら1万5千の兵を率いて信濃国諏訪上原まで出陣。諸将に国境を警備させる。 上野岩櫃城(群馬県吾妻郡東吾妻町)にいた真田昌幸(1547~1611)は、沼田城主の叔父・矢沢頼綱(1518~1597)に兵を召集させ、昌幸自身は勝頼のもとへ駆けつけた。 | 3545 |

西暦1582

| | | | |
|------|------|---|------|
| 天正10 | 2月2日 | <p>「武田征伐―第一次鳥居峠の戦い」。</p> <p>武田勝頼(1546~1582)、木曾義昌(信玄の娘婿)(1540~1595)を撃たんとし、諏訪郡上原に陣す。勝頼、まず、鳥居峠を固める敵を追い払うべし、と命令。</p> <p>今福筑前守昌和を大将に、兵三千騎、鳥居峠へ向かう。</p> <p>武田軍は、鳥居峠(長野県木曾郡木祖村藪原)で木曾義昌軍と激突、木曾を追い散らす。</p> | 3546 |
| | 2月3日 | <p>深溝松平家忠(1555~1600)、酒井忠次(1527~1596)より近日中に遠江国・駿河国国境の城普請の命令を受ける。(['家忠日記'])。</p> | 3547 |
| | 2月3日 | <p>「武田征伐」。</p> <p>総師織田信忠、森長可(1558~1584)・団忠正(?~1582)らを先鋒とし、尾張・美濃の軍勢を木曾口・岩村口の各方面に出勢させる。(['信長公記'])。</p> | 3548 |
| | 2月3日 | <p>「武田征伐」。</p> <p>織田信長、甲斐国討伐の進路と分担を決定。駿河口は徳川家康(1543~1616)、関東口は北条氏政(1538~1590)、飛騨口は金森長近(1524~1608)、伊那口は信長(1534~1582)・信忠(1557~1582)父子が二手に分かれて進軍。</p> | 3549 |
| | 2月5日 | <p>深溝松平家忠、酒井忠次より木曾義昌の寝返りにより近日中に織田信長の出陣があるので、出陣準備を命令される。(['家忠日記'])。</p> | 3550 |
| | 2月6日 | <p>これより先、武田勝頼は、滝ヶ沢に要害を構え、下条伊豆守信氏(信玄の義兄弟)(1529~1582)を守将に入れ置いていた。</p> <p>その家老である弟・下条九兵衛氏長(?~1582)が逆心を企てて伊豆守信氏を放逐し、岩村口より河尻秀隆の軍勢を引き入れて織田勢へ通じてしまう。</p> <p>織田軍、寺社を焼く。</p> | 3551 |
| | 2月6日 | <p>「武田征伐」。</p> <p>織田信忠の先鋒軍、武田氏への攻撃を開始、滝沢城(長野県下伊那郡平谷村)を陥れる。伊那の滝沢城を守るは、武田勝頼に命じられた下条伊豆守(信氏)(1529~1582)。</p> <p>しかし、家老の下条九兵衛(氏長)らが叛逆し、伊豆守を追放。岩村口から河尻与兵衛(秀隆)軍を招き入れる。</p> | 3552 |
| | 2月6日 | <p>「武田征伐」。木曾義昌(信玄の娘婿)、織田信忠の将・塚本三郎兵衛尉に書を送り、信忠の来援を促さんことを請う。</p> | 3553 |
| | 2月8日 | <p>「紀州雑賀の兵乱」終結。</p> <p>再び本願寺顕如(1543~1592)が仲介を呼びかけ、孫一方と土橋方の和睦は成立。雑賀の内紛は、雑賀孫一(鈴木重秀)の勝利で決着した。</p> <p>信長の後ろ盾を得た孫一主導の下、雑賀衆は織田信孝の四国攻めに船百艘を提供するなど、織田氏との関係を強めていく。</p> | 3554 |
| | 2月9日 | <p>羽柴秀吉(1537~1598)、関東の太田資正(三楽斎)(1522~1591)へ、織田信長への内応希望を諒承し、五畿内の件は言うに及ばず中国方面および四国方面までも制圧したので、「上辺」に於ける御用を取り次ぐ旨を通達。詳細は宝林坊に伝達させる。</p> | 3555 |

西暦1582

| | | | |
|------|-------|---|------|
| 天正10 | 2月9日 | <p>「武田征伐―信長、甲州出陣用意を命じる」。</p> <p>織田信長(1534~1582)、武田勝頼討伐のために全十一ヶ条の「条々」を発す。信長が近国の諸将(筒井順慶・池田照政(輝政)・中川清秀ら)に甲斐信濃への出陣を命じる。</p> | |
| | | <p>「信長公信濃国ニ至リテ御動座ナサルベキニツイテ条々 御書出 大和ノ人数出張ノ儀、筒井召シ連レ罷リ立ツ……、摂津国、父勝三郎留主居候テ、兩人子供、人数ニテ出陣、中川瀬兵衛出陣スベキ事、多田出陣スベキ事、上山城衆出陣ノ用意、油断ナク仕ルベキノ事、永岡(長岡)兵部大輔ノ儀、与一郎、同一色五郎罷リ立チ、惟任日向守、出陣ノ用意スベキ事」。「遠陣ノ儀条、人数スクナク召シ連レ、在陣中兵糧ツツキ候ニアテガヒ簡要……粉骨ヲ抽ンズバク候者」。(['信長公記'])。</p> <p>信長出馬に際しては大和衆を出勢させる、河内の連判衆は烏帽子形・高野山・雑賀表への押さええとする、和泉一国の軍勢は紀州へ備えるべきこと、三好康長は四国へ出陣すべきこと、摂津国は父池田恒興が留守居をつとめ子の元助・輝政兩人の軍勢にて出陣すべきこと、中川清秀は出陣すべきこと、多田家は出陣すべきこと、上山城衆は出陣の用意を油断なく行うべきこと、藤吉郎秀吉は中国一円に備えるべきこと、細川忠興と藤孝女婿の一色五郎(満信、義有、義定)(?~1582)などは出陣し、長岡(細川)藤孝は丹後で警護すべきこと、明智光秀は出陣の用意をすべきである。さらに、信長は、以上に出陣を命じた者は遠陣になるゆえ、率いる人数を抑え、在陣中も兵糧が続くよう補給することが肝要である。ただし大軍並みの戦力となるよう、剛力・粉骨の士を選んで引き連れるべきことを伝える。光秀は、信長と近衛前久らの警護が主な任務となる。</p> | 3556 |
| | 2月9日 | <p>「四国討伐」はじまる。信長、長宗我部元親(1539~1599)に対して土佐・阿波二郡を与えた。元親はこれに従わなかったため、この日信長は三男信孝(1558~1583)をしてこの討伐を命じる。この日、信長、三好康長(咲岩、笑岩)(?~?)に、長宗我部征伐の先陣として四国へ出陣命令。</p> | 3557 |
| | 2月11日 | <p>深溝松平家忠のもとに、桜井の舞々が来る。</p> | 3558 |
| | 2月12日 | <p>深溝松平家忠、酒井忠次(1527~1596)より近日中に駿河国に出陣するよう命令を受ける。松平家忠、石川数正(1533~1592?)より来る2月16日に遠江国浜松城に出陣するよう命令される。(['家忠日記'])。</p> | 3559 |
| | 2月12日 | <p>「武田征伐」。岐阜城(岐阜市金華山天守閣)より織田信忠(1557~1582)・長島城(三重県桑名市長島町)より補佐役滝川一益(1525~1586)が出陣、土田(岐阜県可児市)に陣をとる。信忠を先鋒として信長の命を受けた武田征伐軍は、ぞくぞくと甲斐へ出陣。(['信長公記'])。</p> | 3560 |
| | 2月14日 | <p>これより先、信濃伊那郡松尾城(長野県飯田市松尾代田)将・小笠原信嶺(1547~1598)が、織田信忠に降る。よって、この日、織田信長の将、団景春(忠正、忠直)(?~1582)・森長可(1558~1584)ら、木曾峠を越え、伊那郡に入る。</p> <p>武田方飯田城(長野県飯田市追手町)坂西織部経定(?~1582)・保科正直(1542~1601)らは、高遠城(長野県伊那市高遠町)へ退却。</p> | 3561 |
| | 2月15日 | <p>「武田征伐」。「可為曲事候、城介(信忠)若候、比時一人粉骨尽之、名可取思気相見候間、毎々率爾之儀可有之候、十内十勝手子細候者、……………」。</p> <p>織田信長、信忠に従って東国へ出陣し国境の難所を突破した滝川一益からの注進に応え、信長側は出陣に備えているので時期を見計い発足日限を上申する旨、また若い信忠を制御する旨を指示。もし失敗したならば織田信長の面前への参上は許可しない旨を通達。</p> | 3562 |

西暦1582

| | | | |
|------|-------|---|------|
| 天正10 | 2月16日 | 木曾義昌(1540~1595)、急迫した情勢を信長に訴え、来援を請う。 | 3563 |
| | 2月16日 | 「武田征伐―第二次鳥居峠の戦い」。 鳥居峠の戦いにて、両軍の大激突がはじまる。木曾義昌、伊那谷を北進せる織田信忠の兵に呼応して木曾谷を鳥居峠に進み、武田勝頼の将・今福筑前守(昌和)と戦ひて、之を破る。 | 3564 |
| | 2月16日 | 「武田征伐」。織田信忠(1557~1582)、日向宗栄玄徳齋等を伊那郡大島城(長野県下伊那郡松川町元大島)に攻めて、之を敗走せしむ、尋いで、信忠、河尻秀隆(1527~1582)・毛利秀頼(1541~1593)をして、同城を守らしめ、軍を同郡飯島に移す。 武田道遠軒信綱(武田信廉) (信玄の弟)(1532?~1582)・大嶋城代日向玄徳齋らは城を支えきれず、夜中に逃亡。安中左近は、高嶋城へ退却。 | 3565 |
| | 2月16日 | 深溝松平家忠(1555~1600)、「かち衆」・「夫丸」を先発させる。(『家忠日記』)。 「かち衆」は、馬や乗物に乗らない徒歩の家来。「夫丸」は、人夫・人足・陣夫の称。 | 3566 |
| | 2月16日 | 「家康、遠江を掌握」。 徳川軍、遠江における武田氏の最後の砦・小山城(静岡県榛原郡吉田町)を開城させる。武田勝頼の将・小山城代大熊朝秀(長秀)(?~1582)は、小山城を脱して甲斐に逃げ帰る。家康は、永禄11年(1568)12月12日に遠江に進入して、今川氏の旧勢力を追い払うも、新しく武田信玄・勝頼父子の侵入に遭い、これと争うこと前後14年の長い間にわたって、ようやく遠州全土の経営が成った。 | 3567 |
| | 2月17日 | 武田家部将の保科正直(1542~1601)ら、飯田城(長野県飯田市追手町)を放棄し逃走。 | 3568 |
| | 2月17日 | 深溝松平家忠、遠江国浜松城に到着、武田側が遠江国小山城(静岡県榛原郡吉田町)を放棄した旨を知る。(『家忠日記』)。 | 3569 |
| | 2月18日 | 「武田征伐」。徳川家康、浜松城を發し遠江国掛川城に着陣、駿河西部へ侵攻を始める。深溝松平家忠、遠江国浜松城を出陣。(『家忠日記』)。 | 3570 |
| | 2月18日 | 徳川家康(1543~1616)、北畠信意(織田信雄、信長の次男)に、関東出船の対応について三河・遠江両国の諸湊に命じたことを伝える。 | 3571 |
| | 2月19日 | 徳川家康、牧野(静岡県島田市金谷)へ進み武田軍が逃亡した小山城を接收。 | 3572 |
| | 2月19日 | 織田・徳川軍の武田領侵攻を確認した北条氏も、武田攻めに参加すべくようやく動き出す。 | 3573 |
| | 2月20日 | 上杉景勝(1556~1623)、木曾義昌(信玄の娘婿)(1540~1595?)の武田勝頼に叛くを聞き、勝頼に援兵を送らんとす、是日、勝頼(1546~1582)、之を謝し応援を求む。 | 3574 |
| | 2月20日 | 徳川家康、武田方の依田信蕃(1548~1583)の駿河田中城(静岡県藤枝市田中)を囲む。松平家忠、駿河国田中城を攻撃。(『家忠日記』)。 | 3575 |
| | 2月20日 | 北条氏は武田攻めをめぐって終日評議を行う。西上野・甲斐・駿河のいずれかに出陣することを決め、陣触れを行う。 | 3576 |
| | 2月21日 | 「第三次持舟城の戦い―2月21日~27日」はじまる。 深溝松平家忠、遠江国持舟城を包囲。(『家忠日記』)。 織田軍と連携して出撃した徳川軍、武田方の持舟城(静岡県駿河区用宗城山町)の賢雪道与(朝比奈信置)(1528~1582)を包囲する。朝比奈信置は、天正9年(1581)に家督を信長(?~1582)に譲って隠居し、賢雪道与と称した。 | 3577 |

西暦1582

| | | | |
|------|-------|--|------|
| 天正10 | 2月21日 | 「武田氏の駿河占領、終わる」。 徳川家康(1543~1616)、駿府に侵攻。駿河国駿府館(静岡市葵区駿府城公園)を占領。武田方の室賀正武(?~1584)や弟の屋代秀正(1558~1623)は駿河丸子城(静岡市駿河区丸子)を守備していたが、徳川軍に駿府を占領されると城を捨て逃亡した。 | 3578 |
| | 2月21日 | 「此百姓等子細在之、対朱印相出之上、当軍勢聊以不可、手差若於違背、之輩速可加、成敗者也仍如件」。 家康、阿部善九郎(阿部正勝)(1541~1600)を奏者として朱印状をもって、とうめ郷(当日郷)(静岡県焼津市浜当目・岡当日付近)に禁制を与える。 | 3579 |
| | 2月21日 | 「此百姓等子細在之、朱印相出候之」。 家康、朱印状をもって広野、小坂、足窪などの安倍郡(静岡市葵区)に禁制を与える。 | 3580 |
| | 2月22日 | 「第三次持舟城の戦い」。武田方賢雪道与(朝比奈信置)・奥原日向守軍は、当日峠を越えて迎撃するが敗退。 | 3581 |
| | 2月22日 | 「今度忠節之子細付而对朱印之上者」。 徳川家康、阿部三ヶ郷(駿河安倍郡)に禁制を發し、人取りを禁じる。 | 3582 |
| | 2月22日 | 「禁制 建徳寺 一当手軍勢甲乙人」。家康、建徳寺(静岡市葵区建徳)に禁制を与える。 | 3583 |
| | 2月23日 | 「武田征伐」。信長、黒印状をもって河尻与兵衛(秀隆)(1527~1582)へ、武田勝頼討伐にあたり全七ヶ条の指示を下す。 信長、信忠軍の軍目付河尻秀隆に、織田信忠の急な進撃を戒めるよう指示する。一、城介(信忠)についてだが、信長が出馬するので、前進しないように滝川一益と相談して申し聞かせろ。 一、森長可と梶原景久が談合もなしに前進した件だが、若き者たちであるから、この時に粉骨を尽くして功名を上げ、又それを私に訴えるためだろう。粗忽な行動をせぬよう度々申し聞かせたが、なお申しておく。彼らの面倒をみてよくよく申し聞かせること、それが専一だ。……。 | 3584 |
| | 2月23日 | 「第三次持舟城の戦い」。深溝松平家忠、遠江国持舟城の堀際に竹束を寄せて攻撃準備を行う。(『家忠日記』)。 | 3585 |
| | 2月23日 | 「第三次持舟城の戦い」。徳川家康(1543~1616)、持舟城に着陣。 | 3586 |
| | 2月25日 | 「穴山梅雪、謀叛」。 駿河江尻城(静岡市清水区江尻町)主・穴山梅雪(1541~1582)、夜半、風雨に紛れて、甲府の穴山氏館で実質的な人質として過ごしていた妻見性院(武田信玄の次女)(?~1622)と嫡男勝千代(1572~1587)を盗み、河内下山(山梨県南巨摩郡身延町下山)まで退去させる。 | 3587 |
| | 2月25日 | 「此百姓等子細有之、対朱印相出候之」。家康、高根郷(静岡県藤枝市)中に朱印状。 | 3588 |
| | 2月26日 | 北条氏政・氏直父子が駿河に出陣し、天神ヶ尾城(静岡県沼津市岡宮天神ヶ尾)を攻略。 | 3589 |
| | 2月27日 | 武田方の今福丹波守(善十郎友実)(?~1582)が守る久能城(静岡市駿河区根古屋)が、徳川軍の包囲によって落城。虎孝(丹後守、善十郎友実)は麓の村松において自害という。翌年、家康異父弟の松平康俊(1552~1586)が城主となる。 | 3590 |
| | 2月27日 | 「第三次持舟城の戦い―2月21日~27日」終結。 駿河国持舟城との和議が締結される(『家忠日記』)。家康、持舟城を開城させる。 | 3591 |
| | 2月28日 | 「武田征伐」。織田信長、河尻秀隆(「川尻肥前守」)へ、信濃国高遠城攻略のために「繫之城」を構築するよう命命。 | 3592 |

西暦1582

| | | | |
|------|-------|--|------|
| 天正10 | 2月28日 | 「武田征伐」。織田信長、再度進軍してきた河尻秀隆(1527~1582)へ、「道筋跡」及び繋ぎの城を普請して織田信長「出馬」以前には竣工すべきこと、「大百姓以下」は「草のなひき時分」を見計らうものであるのに役に立つものであること、武田勝頼の近所には信長が大軍を以て「御出張」するのでそれ以前は越度無き様にすべきことを命令。またこの旨を織田信忠・滝川一益へも通達したので油断無く「つなぎの城」の構築に努力し、時期が来れば信長が信濃国へ着陣することを通達。 | 3593 |
| | 2月28日 | 北条軍、伊豆に侵攻し武田方戸倉城(静岡県駿東郡清水町徳倉)を攻略。北条軍は駿河にも侵攻し、夜中、駿河三枚橋城(沼津城)(静岡県沼津市大手町)を開城。曾根河内守、三枚橋城を明け渡して甲斐へ逃げる。 | 3594 |
| | 2月28日 | 穴山梅雪の家康内通で、武田勝頼、信濃国諏訪上原の陣所を焼き捨て、甲斐国新府へ撤退するも、逃亡するものが相次ぎ、千騎に満たず。 | 3595 |
| | 2月28日 | 北条氏邦(北条氏康の四男)(1541~1597)が、武田方の上野国箕輪城(群馬県高崎市箕郷町)入城。城代・内藤昌月(保科正直の弟)(1550~1588)は北条に降る。 | 3596 |
| | 2月29日 | 「武田征伐」。織田信忠(1557~1582)、近江国安土城の織田信長へ、武田勝頼の撤退を報告する注進状を發す。去二十八日、武田勝頼父子と同信豊は諏訪の上原の陣を焼き捨て引き払い、新府の館へ軍勢を納めた。 | 3597 |
| | 2月29日 | 北条軍、吉原(静岡県富士市吉原)に出陣。 | 3598 |
| | 2月29日 | 武田方の朝比奈駿河守(遠江国持船城主)、深溝松平家忠の付き添いにより遠江国久野城(静岡県袋井市鷲巣字上末元)に退却す。(['家忠日記']。 | 3599 |
| | 2月29日 | この日、穴山梅雪(信君)(1541~1582)、徳川家康(1543~1616)に降る。 穴山梅雪、徳川家康から降伏勧告を受け、武田家の救済・家名存続を条件に、江尻城(静岡市清水区江尻町)を開城。 | 3600 |
| | 2月下旬 | 「武田征伐」。北条氏政軍、駿河東部へ侵攻開始。 | 3601 |
| | 2月一 | 小笠原貞慶(1546~1595)はこの頃、飛騨を経由して筑摩郡金松寺(長野県松本市梓川梓)に入り、旧好の士にこれを伝える。この時、筑摩郡に残っていた二木重吉らも金松寺へ行き、貞慶に従う。 | 3602 |
| | 3月1日 | 「織田信長黒印状」。信長、河尻与兵衛(秀隆)へ、武田勝頼討伐のための織田信長出陣前に全五ヶ条の指示を下す。信長は、老将の秀隆に、大将の城介(織田信忠)、先鋒の森勝三(森長可)、梶原平八郎(梶原景久)を制御するよう命じた。 | 3603 |
| | 3月1日 | 「依田信蕃、家康に降る一足かけ9年の歳月をかけ、家康は田中城を開城した」。 徳川家康は、依田信蕃(1548~1583)の立て籠る駿河田中城(静岡県藤枝市西益津)を包囲し、この月、「武田家臣は皆主家を背いており、滅亡は間違いない。直ちに開城せよ」と降伏を勧告する。信蕃は「武田家臣の書をもって真偽を計りたい」と答えたため、家康は穴山梅雪の書を送る。これを見て信蕃は城を明渡したため、新たに所領を宛がおうとするも、信蕃、「勝頼の存亡の仔細を承るまでは受け入れられない」と答え、信州佐久に帰る。結局、勝頼が減び、その後の信長の残党狩りの厳しさから家康に密かに匿われた。 | 3604 |
| | 3月1日 | 深溝松平家忠(1555~1600)、穴山信君(駿河国江尻城主)が徳川家康に寝返ったことを知る。(['家忠日記']。穴山信君(1541~1582)は、駿河の岩原地蔵堂に参上して徳川家康(1543~1616)と対面したという。 | 3605 |
| | 3月1日 | 北条軍、夜中、武田方駒井昌直(政直)(1542~1595)城将らの深沢城(静岡県御殿場市深沢)を攻略。 | 3606 |

西暦1582

| | | | |
|------|------|---|------|
| 天正10 | 3月2日 | 「武田征伐」。織田信忠、信濃国高遠城を攻略して甲斐国へ進軍す。仁科盛信(「仁科」)、信濃国高遠城に於いて戦死。(['立入左京亮入道隆佐記']。織田信忠(1557~1582)、降伏に応じない伊那郡高遠城を総攻撃して攻略。高遠城落城、守将仁科盛信(信玄五男)・副将小山田昌行ら壮烈な戦死。 | 3607 |
| | 3月2日 | 「就甲州乱入、彼国可為進所之旨、所之旨所務無之以前茂、二年も三年も從安土被加御不持候様、可申成候、若首尾於相違者、從此方合力可申候、為其一書進達候、恐々謹言」。 徳川家康、穴山信君(「穴山殿」)へ、甲斐国「乱入」にあたり甲斐国を進軍する約束について、「所務」(年貢収入)が無くとも二年・三年は織田信長(「安土」)より扶持が加えられるように取り成すこと、もし首尾通りにならなければ徳川家康が「合力」することを通達。 | 3608 |
| | 3月2日 | 北条勢、富士・駿東郡を制圧。 | 3609 |
| | 3月2日 | 武田勝頼の元に高遠城(長野県伊那市高遠町)落城の報が届く。武田勝頼弟の仁科盛信・小山田昌行・今福昌和・原貞胤らが全滅する。新府城(山梨県韭崎市)で、最後の軍議を開く。勝頼の側近・漆戸虎秀ら4名が連署して、上杉景勝側近の長井昌秀に援軍要請の書を發する。「諸方御敵に成ければ甲州へ御帰陣も無覚東御事也ければ某の領知上州吾妻郡岩櫃の城へ御入有べし」。真田昌幸(1547~1611)は、武田勝頼を上野岩櫃城(群馬県吾妻郡東吾妻町)に迎え入れる準備をしているので、甲斐を逃れ岩櫃城入城を申し出た。そして一同の同意を得た後、岩櫃城に準備のため、急ぎ入城した。この時、昌幸は武田氏に人質として出していた妻子(山手殿、信之)を連れ帰ったという。その後、同じく勝頼の側近だった小山田信茂(1539/1540~1582)や長坂長閑齋(虎房、光堅)(1513~1582)が、昌幸は譜代家臣ではないため信用できないと勝頼に進言し、勝頼も小山田の意見に従うことになる。 | 3610 |
| | 3月3日 | 「武田征伐」。「廿九日注進、今日三、到来、披見候、仍於駿州穴山依謀反、四郎甲州北退之旨……………其先一切無用、我々事、近々出馬候間、示合手間不入可討果候、……」。織田信長、織田信忠「城介殿」へ、駿河国の穴山梅雪(信君)が謀反して武田勝頼(「四郎」)が甲斐国へ撤退したこと、信君が徳川家康に内通したこと、信濃国大島から飯島への陣替を諒承したこと、信忠のこれ以上前方への進軍は「一切無用」であること、信長自身は近々「出馬」するので武田軍を容易く撃破する予定であることを通達。また先頃に、河尻秀隆へもこの旨を通達したことを通知。 | 3611 |
| | 3月3日 | 織田信忠軍、上諏訪表へ出馬し、諸所へ放火を行い、諏訪大社上社は、この焼き討ちにより神殿をはじめ諸伽藍ごとく煙となって消えた。関東の安中氏は大島を脱出後、諏訪湖の外れにある高島という小城に籠っていたが、織田信忠の軍勢を前に抱えがたきを悟り、城を津田(織田)源三郎勝長(1568?~1582)に明け渡して退いた。一方、木曾口の鳥居峠にいた木曾義昌の軍勢も深志表へ討って出て、降伏させ、深志城(長野県松本市丸の内)将・馬場信房(二世)(昌房)は、城を織田長益(有楽齋)(信長の実弟)へ引き渡して退散していった。 | 3612 |
| | 3月3日 | 穴山梅雪(1541~1582)、対徳川工作に功のあった竜雲寺(静岡県浜松市西区入野町)清蔵主に感状を与える。 | 3613 |
| | 3月3日 | 徳川先軍、駿河国興津から甲斐国万沢(山梨県南巨摩郡南部町)へ進出。 | 3614 |
| | 3月3日 | 「禁制 南松院 一当手軍勢甲乙人」。 徳川家康、甲斐国南松院へ全三ヶ条の「禁制」を下す。さらに松岳院、龍花院、円藏院、大聖寺に「禁制」を下す。 | 3615 |

あとがき

本書(中巻)は、天正10年(1582)1月の信長の甲州征伐下知からはじまり、「本能寺の変」を経て、天正20年(文禄元年)(1592)「文禄の役」のはじまり、家康清華成頃までの、家康の軌跡を記載しました。「本能寺の変」、「家康三大危機の三番目一伊賀越え」、「山崎の戦い」、「清須会議」、「家康の第二次甲州入り」、「天正壬午の乱」、「家康は三河・遠江・駿河・甲斐・南信濃を手中とし、五国を領有する大大名へと成長」、「織田信雄、秀吉と断ち家康と結ぶ」、「小牧・長久手の戦い」、「家康、和睦の証に次男秀康を秀吉に差し出す」、「第一次上田合戦」、「家康、駿府城を修築しはじめる」、「石川数正、出奔」、「家康、北条氏政と会見」、「家康、秀吉妹朝日姫を娶る」、「家康、秀吉に臣従」、「家康、居城を浜松城から駿府城へ移す一家康、駿府を五カ国の行政府とする」、「家康47歳、絶対服従の誓紙を差し出す」、「七ヶ条定書一家康、五カ国領内の支配を固める」、「秀吉、北条氏に宣戦布告」、「小田原の役一徳川領に豊臣大名が在番する」、「徳川家康関東移封の約、成る」、「八朝の日の起源」徳川家康49歳、正式に江戸入府、「秀吉、天下統一一奥州仕置」、「秀吉、甥・秀次に関白・聚楽第を譲る」、「文禄の役一文禄1年1月5日～文禄3年12月13日」はじまる、などなど、激動の徳川家康波乱の時代を垣間見て頂き、「大河ドラマ」視聴を楽しんでいただきたら幸いです。

編集にあたり、主に「上巻」掲載の主要参考図書や国立国会図書館デジタルコレクション、東京大学デジタルコレクション、国の公式WEB、各自治体・各大学・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

最後になりましたが、写真提供などしていただいた愛知県・静岡県自治体及び各機関様、また、ご協力いただきました取材先様、スタッフの皆さまに、厚く御礼申し上げます。

写真協力(上巻含む)

(一社)豊橋観光コンベンション協会 豊明市観光協会 岡崎市 田原市博物館
安城市教育委員会 蒲郡市観光協会 新城市観光協会 長久手市 静岡県観光協会
浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 掛川市 藤枝市郷土博物館 清水町教育委員会
鳥越一朗 (順不同)

文書等並べて辿る、家康、松平一族・家臣 徳川家康75年の生涯年表帖 中巻(全3巻)

その時、秀吉は。最強の家康に天下人秀吉の配慮がにじみ出る

第1版第1刷

発行日 2023年5月20日

デザイン 岩崎宏

編集・制作補助 ユニプラン編集部

橋本豪

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>
(E-mail) info@uni-plan.co.jp

〒601-8213 京都市南区久世中久世町1丁目76

TEL(075)934-0003 FAX(075)934-9990

振替口座/01030-3-23387

印刷所 株式会社ファインワークス

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-576-4 C0021